
炎の魔導師

minami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の魔導師

【Nコード】

N2561T

【作者名】

minami

【あらすじ】

リゼーン村に住む

兄弟 エルス・ウォーカー、弟レン・ウォーカーが居た

エルスの10歳の誕生日、

村は、火の海に変わり生き残ったのはウォーカー兄弟とレナ・レインドが

生き残った

ウォーカー兄弟は

魔導師になる為の旅に出る事を決意する

入試試験（前書き）

どうもminamiです

今回はオリジナル作品、炎の魔導師を書いてみました！
がんばって書きますのでよろしくお願いします！

入試試験

エルス「母さん!」

レン「だいじょうぶ兄さん?」

エルス「夢を見ただけさ」

レン「だいぶうなされていたから、
びっくりしちゃったよ」

エルス「今日は入試試験だったなあ」

レン「がんばってね兄さん」

エルス「お前もだろ」

レンはにこつと笑った

エルス「じゃあ行こう!」

エルス、レンは試験会場に向かった

受付「エルス・ウォーカーさんがエントリーナンバー145で
レン・ウォーカーさんがエントリーナンバー146です
このまま奥にお進みください」

レン「入試試験受ける人っておおいよね兄さん」

エルス「当たり前だろ」

レン「絶対受かるうね兄さん」

エルス「ああ」

審査員「それでは入試試験をはじめる

制限時間は1時間 それでは始め！」

エルスは10分ぐらいで終わった

レンも10分ぐらいで終わった

審査員「入試試験はここで終了！

結果はあす発表」

エルス「入試試験も案外たいした事ないな」

レン「そうだね、明日が楽しみになってきた」

ウォーカー兄弟は宿に戻った

入試試験（後書き）

レン「次回予告

入試試験結果！」

エルス「質問、観想 募集中だぜ！」

入試試験発表（前書き）

エルス「観想、質問がこねー」

レン「しょうがないよ兄さん。始まったばかりだし」

エルス「そうだな」

レン「これからがんばっていこう」

入試試験発表

レン「兄さん」

エルス「ん？」

レン「久ぶりにレナに電話掛けてみよ」
エルス「べつにいいぜ」

（プルプルプル・・・）

レナ「はい、もしもし」

レン「レナ久ぶり」

レナ「レン、久ぶり怪我とかしてない？」

レン「大丈夫だよ」

レナ「ところでエルスは？」

レン「いるよ」

レナ「代わって」

レン「兄さんレナが代わって欲しいって」

エルス「もしもし」

レナ「エルス、久ぶり」

エルス「元気か？」

レナ「元気だよ」

「そういえば入試試験はどうだった？」

エルス「俺もレンも楽勝だったぜ」

レナ「電話切るね」

エルス「ああ」

電話は切れた

レン「明日が楽しみだね」

エルス「ああ」

「一晩経った・・・」

エルス「レン起きろ」

レン「兄さんもうちょっと寝かせて・・・」

エルス「今日は何の日かな」

レンは飛び上がるように起きた

エルス「早く行くぞレン」

レン「待つてよ兄さん」

エルスとレンは試験会場に向かった

エルス「エルス・ウォーカー、レン・ウォーカーは合格か？」

受付「はい、エルス・ウォーカーさんとレン・ウォーカーさんは合格です」

エルス「レン合格だってよ」

レン「やったー！」

受付「この手帳をお渡しします」

エルスとレンは手帳をもらった

受付「明日からはじまるので必ず来てください」

入試試験発表（後書き）

エルス「観想、質問、募集中だぜ！」
レン「次回予告」

いよいよはじまる魔導師学校。
初日からハプニングが起こる
次回もお楽しみに！」

魔導師学校（前書き）

エルス「今日は俺の初バトルだぜ」

レン「兄さんががんばってね」

エルス「おう！」

魔導師学校

エルス「案外らくしうだったよな」

レン「兄さんは何年位で卒業する？」

エルス「1年だ」

レン「じゃあ僕も1年で」

エルス「いよいよ明日からか」

レン「がんばろうね兄さん」

エルス「ああ」

エルスとレンは宿に戻った

一晩経った……

レン「兄さん起きて」

エルスは起きた

レン「さきに行っているよ」

エルス「わかった」

レンは宿を出た

エルス「俺もそろそろいくか」

エルスも宿を出た

レン「兄さん遅いよ！」

エルス「わりい」

レン「早く行くよ」

エルス、レンは魔導師学校に向かった

「警報！西校舎付近で魔獣^{ビースト}発見レベルは2、生徒は近づかないでください」

エルス「なんか面白そうじゃねーか」

レン「兄さん、生徒は近づくなって警報あつたじゃないか」

エルス「どうせ倒さないとけないんだろ」

レン「もう勝手にして」

エルス「レンも来いよ」

レン「嫌だよ」

エルスはレンの手を引っ張り西校舎に向かった

エルス「あいつが魔獣^{ビースト}だな」

魔獣「グオオオオ！」

エルスは手を叩いた

すると魔獣が燃えた

魔獣「グオオオオ！」

レン「兄さん派手にやらないでよ」

エルス「わかってる」

エルスがまた手を叩くと魔獣が燃え尽きた

「君、大丈夫か？」

一人の男が近寄ってきて声を掛けた

エルス「大丈夫だけど」

「君、年はいくつ？」

エルス「14だけど・・・」

クゼ「そうか・・・もうし遅れた私の名前はクゼ・レシットだ」

エルス「俺はエルス・ウォーカだ」

クゼ「エルス君また会うといいね」

クゼは消えるようにして居なくなった

魔導師学校（後書き）

レン「初バトルお疲れ様！」

エルス「楽勝だったぜ」

レン「次回もがんばってね」

エルス「質問、観想募集中だぜ」

魔導師学校―中編―（前書き）

エルス「腹減った・・・」

レン「ここに激辛チップスあるよ」

エルスはおいしそうに激辛チップスを食べた

魔導師学校―中編―

エルス「そろそろ教室にいくぞ」

レン「わかつてるよ兄さん」

エルスとレンは教室に向かった

エルス「あんまりひといないな」

レン「まだ早かったんだよ」

それから5分ほどで15人入ってきた

「私が担任のグレ・アルスです。

この1年A組みは試験において

優秀な成績を出した者達が

集められたいわば特進学級です

・・・以上」

キンコーカーンコー

グレ「それでは休んで良し」

エルス「先生の話長いよな」

レン「しょうがないじゃないか初めてだし」

エルスとレンが話していると前の席の生徒が話しかけてきた

「お前ら名前なんだ？」

エルス「俺はエルス、エルス・ウォーカーだ」

レン「僕は弟のレン・ウォーカーです」

ライ「俺はライ・ミシルだよろしくな」

魔導師学校―中編―（後書き）

レン「今日はキャラクター紹介だよ」

エルス「今回は俺だぜ！」

名前 エルス・ウオカー

属性 炎

好きな食べ物 辛いもの

身長 155CM

髪 茶色 短め

魔神獣（前書き）

minami「小説書くのってすごい疲れる」

エルス「なに行つてんだお前が書かなくちゃ、俺の出番がないじゃないか」

レン「まあ、いいじゃないか兄さん」

エルス「レンはいいかも知れねーけど俺はもうちょっと

作者にがんばって書いてもらわないと困るんだよ」

後書きに続く・・・

魔神獣

エルス「ライは今何歳だ？」

ライ「14だ」

レン「兄さんと同じ年だね」

ライ「レンは何歳なんだ？」

レン「13だよ」

キンコーカーンコーン

ライ「話はまた後にしようぜ」

エルス「おう」

グレ「今日は魔神獣^{ジュアル}についてです。

魔神獣は9世紀頃の魔獣^{ビースト}です。」

「先生質問です。

魔神獣は魔獣クラスなんですか？」

グレ「SSです。

だから魔神獣と言う名前がついたのです。

魔神獣は魔術の五結界 火、水、雷、風、土の
属性の魔術を使えていました。」

エルス「何で魔獣が魔術を使えるんだ？」

グレ「魔獣は魔術、人語、魔導師が持つ知力などを理解したので、魔術が使えたのです。

それから魔獣と魔導師とで長い戦いが始まったのです。魔獣の強さは神に等しいぐらいの力になりました。でもある5人の魔導師が力を合わせ、魔獣を倒したのです。」

レン「そのあと魔術などを理解する魔獣は居なかったのですか？」

グレ「一匹も居ませんでした」

ライ「じゃあ何で魔獣は5の力を操れたんですか？」

グレ「それがまだわかっていないのです。」

キンコーカーンコーン

グレ「今日の勉強は終わりです。

明日はあなたがたたちの力を見たいので実戦してもらいます」

魔神獣（後書き）

minami「こつちも必死で考えてるんですよ」
エルス「じゃあ死ぬ気でがんばれよ」
レン（兄さん言いすぎだよ・・・）

シチュー（前書き）

エルス「作者が1回原稿消えたから切れてる・・・」

レン「今日は文句を言わないほうがいいと思う」

それから5分後・・・

minami「はあ、小説書くの今日で2回目だから疲れた」

エルス「お疲れ様」

後書きに続く

シチュー

ライ「エルスとレンはどこに泊まるんだ？」

エルス「まだ決まってるないぞ」

ライ「じゃあ俺の家に泊まって行けよ」

レン「いいの？」

ライ「俺の家族はみんな歓迎するぞ」

エルス「じゃあ行こうぜ」

ライ、エルス、レンはライの家に向かった

ライ「ただいま」

「お帰り兄ちゃん」

ライ「今日は友達呼んだぞ」

「ご飯ちょうど出来たから
みんなで早く食べようよ」

エルス「ライって兄弟何人居るんだ？」

ライ「5人だ」

レン「5人兄弟か・・・」

ライ「それよりも早く飯食おうぜ」

ライはシチューを3つ持ってきた

エルス「俺、シチュー好きだぜ」

レン「僕も」

ライ「俺もだ」

エルスとレンとライはシチューを食べ始めた

エルス・レン・ライ「うまい！」

エルスたちはシチューを食べ終わった

エルス「眠くなってきた」

レン「僕も」

ライ「寝室はこっちだ」

ライ、エルス、レンは寝室に向かった

エルス「レン、ライ俺は先に寝るぞ」

レン「僕も寝るよ」

ライ「俺も」

エルス、レン、ライはベットにはいると眠った

シチユー（後書き）

minami「エルスがそんな事言うなんて雨でも降るんじゃないか・・・」

エルス「なんだとお」

レン「喧嘩はやめようよ」

それから1時間くらい口喧嘩は続いた

実戦

レン「兄さん起きてもう朝だよ」

エルス「・・・ふああ」

エルスはあくびをしながら起きた

ライ「早く学校にいくぞ」

ライ達は魔導師学校に向かった

グレ「今日は君達の力を見るために実戦してもらいます」

エルス「なにをするんだ？」

グレ「ここにくじがあるので引いてください」

エルス達はくじを引いた

グレ「くじにはマークが書いてあります、
同じマークの人がチームになります」

エルス「レンとライは何のマークだ？」

レン「星のマークだよ」

ライ「レンと同じマークだ」

レン「兄さんは何のマークなの？」

エルス「星だ」

グレ「そろそろチーム決まったと思うので、
実戦に入りたいと思います」

エルス「先生対戦相手は誰なんですか？」

グレ「あなた達の対戦相手は光の^{オラシオンセイイス}六魔です」

六魔

エルス「オラシオンセイイス六魔……」

グレ「今日は3番隊隊長のレインさんと5番隊隊長のオシアさんです」

エルス（六魔の力を見るいい機会だ）

グレ「レインさんと戦いたいチームはいますか？」

エルス「俺達が戦います」

レン・ライ「!？」

レイン「君達が相手か？」

エルス「ああ」

レン「兄さん無理だよ」

エルス「やってみないとわからないだろ」

ライ「そうだな」

レイン（髪の毛は茶色で短めこいつがクゼがいていた少年か・・・）

オシア「レインが先とはね」

レイン「なにか文句でもあるのかオシア？」

オシア「別にないけど、1年坊主達にお前の力見せてやれ」

レイン「あたり前だ」

クゼ「レインさんとエルス達には一枚の皿をつけてもらいます。
どこにつけるかは自由に」

エルス「俺は腹につける」

レン・ライ「俺（僕）も」

レイン「腹につけるか……」

クゼ「皿を割られてしまったら負けです
では……始め」

六魔（後書き）

エルス「次はやつと暴れられるぜ」

レン「でもやっぱり勝てないんじゃないの？」

エルス「いや絶対勝つんだ！」

六魔の力

エルス「レンは遠距離で攻撃してくれ」

レン「了解」

ライ「俺はどうすればいいんだ？」

エルス「ライの戦い方は知らないから、
ライが得意な方でいい」

ライ「じゃあ俺は短距離で」

エルス「じゃあいくぞ！」

レイン「来い」

エルスは手を叩いた

・・・すると周りが燃えた

レンも手叩くと

電磁波の様なものが手に宿った

レイン「炎で体力を減らし、雷で動きを止めるそうのことだろ」

エルス・ライ「!？」

レン（兄さん達の考えが完全に読まれている）

レイン「だがそんなことは俺にはきかない」

レインが手を叩くと周りの炎が消えた

エルス「炎が消えた？」

レイン「そろそろこっちも反撃と行くか」

レインの周りに水が宿った

ライ「なぜ魔術を発動してないのにそんなことができるんだ？」

レイン「俺はさっきの術を発動したときにこの術を発動したんだ」

エルス「これが六魔の力……」

レイン「まずは1人目」

レン（早い、動きについていくのでやっとだ）

レイン「遅い」

レインはレンの皿を割った

科学変化

レン「!？」

レイン「お前らの力はこんなものか？」

エルス「ライちょっと耳をかしてくれないか？」

ライ「なんだ？」

エルス「・・・・・・・・・・」

ライ「やれるのか・・・。」

エルス「やるしかない」

レイン（何を企んでいる・・・）

ライはレインに目掛けて電磁波を撃った

レイン「無駄だ」

するとエルスが手を合わせた

バアーン

大爆発が起こった

エルス「はぁ はぁ はぁ」

ライ「だいぶ魔力使っちゃまったよ」

エルス「俺もだ

ちよつとやり過ぎたか」

レイン「ほお

少しは考えたようだな」

エルス「なぜだ・・・」

レイン「電磁波を水に当て科学変化を起こし、

炎で大爆発を起こす。

まともにくらっていたら

腕1本くらいはなくなっていたかもしれないな」

エルス「なぜあの大爆発無傷なんだ？」

レイン「さっきのは俺の分身だ」

電磁波

レイン「そろそろ終わらせるか・・・」

エルス「ライ、時間稼ぎしてくれないか？」

ライ「わかった」

エルスは手を合わせ、目をとじた

レイン「無駄だ」

レインがエルスを攻撃しようとした

ライ「そうわさせない！」

ライが手を叩いた

雷がレイン目掛けて落ちてきた

レインは雷を軽々とよけた

レイン「君の力はこんなものか？」

ライ「まだだ」

レインが見るとライの周りには電磁波が宿っていた

ライ「はあ、はあ、これが俺の・・・全力だ！」

レインが手を合わせた

レイン「これが君の全力か・・・」

ライがレインに電磁波を撃った

レイン（さっきより速い）

ライがレインに殴ろうとした

レインがライの攻撃を受け止めた

レイン（手がうごかない？）

ライ「これで魔術はつかえないな」

レイン「これが狙いか、だが・・・」

レインが片手を握った

するとライの周りに無数の水弾があつた

ライ「なぜ魔術をつかえるんだ？」

レイン「オランオンセイス六魔の力といったものだ」

100分の1

ライはレインの攻撃をよけた

エルス「またせたな」

ライ「遅かったな」

レイン「オシアいま何時だ？」

オシア「11時だ」

エルス・ライ（何で今時間聞くんだよ……）

レイン「やばい殺される……早く終わらさなければ。」と小声で言った

レン「兄さん達勝てるかな……」

オシア「君は最初にやられた……」

レン「レン・ウォーカーです」

オシア「君のお兄さんとても強いね、
今までレインに挑んだ奴は1分も
持たなかったよ」

レン「そうですか……」

オシア「でもレインは100分の1も
出していないと思うよ」

レン「100分の1……」

オシア「たぶんもうすぐ決着がつくと思うよ」

エルスが手を合わせると火の鳥^{フェニックス}が現れた

レイン「魔獣^{ビースト}か……」

エルス「これが俺の魔獣^{ビースト}だ！」

レインが手を合わせると水龍^{ウォータードラゴン}が現れた

ライ「魔獣^{ビースト}を出すために魔力を練ってたのか……」

油断大敵

エルス「反撃開始だ」

エルスが手を合わせた

すると火の鳥が中^{フェニックス}に舞い上がった

レインがフィンガースナップをすると水龍^{ウォータードラゴン}
が火の鳥に攻撃した

レイン「炎が水に勝てると思っているのか？」

エルス「思ってたねーよ」

レイン「まさか……！」

ライ「隙がありすぎだ！」

というとライはレインを攻撃した

レイン「それはどうかな」

レインはライの攻撃をよけた

ライ「何！？」

レイン「終わりだ」

レインはライの皿を割った

レイン「君で最後だ」

エルス（もう魔獣^{ビースト}を操る魔力しか残ってないな）

エルスは手を合わせた

レイン「ほう、まだ戦うとは」

エルス「俺は絶対にあきらめねえ」

決着

レイン「そこまで言うのなら………」

レインがフィンガースナップをすると水龍^{ウォータードラゴン}が消えた

エルス（どういうことだ………）

レイン「火の鳥^{フェニックス}の攻撃を素手で止めてやる」

エルス「!？」

レイン「さあーっ」

エルス「そういうなら行かせてもらっ」

エルスが手を合わせた

火の鳥がレインに攻撃した

レイン（これぐらいなら片手でいけるな）

エルス（ぜんぜん効かない・・・）

レイン「理解したか？俺と君との力の差が」

エルス「そんなことは最初からわかっているさ。
でもなあプライドで負けたら勝つても
俺の中では負けなんだよ！」

レイン「そろそろ決着をつけるか」

エルス「そうだな」

エルス、レインは同時に攻撃した

パリーン

エルスの皿が割れた

エルス「俺の負けだ」

レイン「久しぶりに楽しめたよ」

オシア「レイン早くしないと怒られるぞ」

レイン「では俺はこれで」と言うとレインはどこかに行ってしまった

グレ「次にオシアさんと戦いたいチームありますか？」

・
・
・
・
・
・

グレ「いませんね」

オシア「じゃあ仕事あるのでこれで」と言っでどこかに行ってしまう
った

エルス「はあ、疲れたぜ」

ライ「今日も俺の家に泊まるか？」

エルス「今日はいいわ」

ライ「じゃあ俺帰るは」

エルス「じゃあまた明日」

ライ「ああ」

決着（後書き）

レン「今日はキャラクター紹介のコーナーだよ」
ライ「今回は俺だ」

名前 ライ・ミシル

属性 雷

好きな食べ物 汁物

身長 153cm

髪 金色

力

レン「兄さんレインさんの事でいいたいことあるんだけど」

エルス「あのヤローの事が・・・」

レイン「レインさんは・・・・・・・・100分の1も力を出していないらしいよ」

エルス「!？」

レン「でも兄さん達がいままでレインさんに
挑んだ奴で1番強かったらしいよ」

エルス（六魔オランオンセイヌに入ればあの力が手に入れる事が出来るのか・・・・・・・・）

レン「どうしたの兄さん？」

エルス「六魔に入るぞ」

レン「でもあの目的はどうするの・・・？」

エルス「ちょっと力をつけるだけだ」

レン「兄さんがそういうなら良いけど・・・。」

エルス「まずは学校、卒業しないとな」

レン「うん！」

そのころ・・・

レイン「クゼ、ティアはいるか？」

クゼ「いないぞ」

レイン「よかった……。」

クゼ「それで、あの子達は強かったか？」

レイン「14にしてはまあまあだ」

クゼ「そうか……」

レイン「早くしないとティアが帰ってくる……」

ティア「誰が帰ってくるって……」

レイン「まさか」

ティア「隊長仕事してないでしょう!」

レイン「しょうがないじゃないか……」

ティア「言い訳はいいですから早く仕事してください！」

レイン「わかったよ」

動き

エルス「明日から休みか・・・」

ライ「2日あるからレナに会いに行こう」

エルス「いいけど・・・」

ライ「兄さんちょっと元気ないよね」

エルス「まあな」

ライ（やっぱり今日のバトルの事かな・・・。）

エルス「先に寝るは」

エルスはベットに入った

ライ「兄さん・・・・・・・・・・」

そのころ

ティア「隊長、オシアから手紙が来ていますよ」

レイン「あいつが俺に手紙を送るとは」

レインは手紙を読み始めた

レイン「すまんティア仕事にいつてくる」

ティア「あなたがまじめに仕事するなんて・・・・・・・・」

レイン「この手紙はクゼに渡しておいてくれ」

そういつとレインは部屋を出た

レイン（やつらが動き出したか・・・）

ティペア編―1話―

エルス「レン、起きろ」

レン「兄さん……」

エルス「レナの所行くんだろ」

レン「今起きるよ……」

そう言つとレンは起きた

レン「兄さんが早起するなんて珍しいね」

エルス「今日はたまたま早かっただけだ」

レン「じゃあいーっつか」

エルスとレンは宿を出た

そのころ

レイン「オシア」

オシア「レインか」

レイン「状況はどうだ？」

オシア「まだ派手な動きはしてない」

レイン「そうか・・・」

オシア「先に潰すか？」

レイン「もう少し様子を見るぞ」

オシア「わかったよ」

ティペア編―2話―

レン「レナ!」

レナ「エルス、レン!」

エルス「今日は休みだから来たぞ」

レナ「来るなら電話ぐらいしてよ!」

エルス「俺、先生の所行ってくるは」

レナ「ちょっと休憩ぐらいしていきなさいよ」

エルスはレナの言うことを聞かないで行ってしまった

レン「まあいろいろあるから気にしないで」

レナ「なにかあったの？」

レン「そのことはあとで話すよ」

レナ「学校って楽しい？」

レン「うん、友達も出来たし」

レナ「エルス、だいじょうぶかな・・・」

レン「どうしたの？」

レナ「最近、変な魔導師がうろついてるから」

レン「兄さんならだいじょうぶだよ」

レナ「そっだよね」

ティペア編―3話―

「助けて！」

少女が走ってきた

エルス「ん？」

ドン

「いてててて・・・」

エルス「大丈夫か？」

「お兄ちゃん助けて！」

「居たぞ！」

エルス「わかった」

「捕まえる！」

エルス「大人がみつともねえまねすんなよ」

「小僧、その娘を渡せ」

エルスが手を合わせた

するとあたりが燃えた

エルス「わたせねえな」

「魔導師か、ここは引くぞ」

エルス「だいじょうぶか？」

「うん、大丈夫」

エルス「君、名前は？」

キララ「キララ！お兄ちゃんは？」

エルス「エルスだ」

キララ「ありがとう、エルスお兄ちゃん！」

ティペア編―4話―

エルス「なんで追われてたんだ？」

キララ「たぶんこの本を狙ってたと思う」

キララはエルスにある本を見せた

エルス「見ていいのか？」

キララ「エルスお兄ちゃんの良い魔導師だからいいよ」

エルスが本を読み始めた

エルス「これは……」。

キララ「この本どこにあったんだ？」

キララ「お父さんからもらった」

エルス「この本、預かってもいいかな？」

キララ「うん」

そのころ

オシア「情報が入ったぞ」

レイン「何だ？」

オシア「奴等、ティペアの本というものを探しているらしい」

レイン「やつらより、ティペアの本を探せばいいということだな」

オシア「そういうことだ」

レイン「では、俺が探すことにしよう」

オシア「よろしくな」

レイン「ああ」

レインは北に向かった

エルス「キララのお父さんってどんな人だ？」

キララ「やさしいお父さんだよ！」

エルス「そうか……あれは……」

キララ「どうかしたの？」

エルス「知ってる顔がいただけだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2561t/>

炎の魔導師

2011年11月16日10時54分発行